
物質人間化装置

三城蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物質人間化装置

【Nコード】

N0285J

【作者名】

三城蘭

【あらすじ】

くだらない発明を繰り返す教授と、毎回その発明に翻弄される助手の平和な日常。

風もなく、冬の太陽が輝く研究室の庭。博士はそこに助手を呼び出していた。

「どうしました、博士。今度は何の発明です？」

「あらゆる物質を人に変えることのできる装置じゃよ」

博士はそう言って腰ぐらいまである金属の塊を運んでくる。そのてっぺん付近にはライトのような物が付けられている。

「これですか？」

「ああ、このライトの部分から発射される光線を浴びれば、何でも人になる」

博士はそう言って、九官鳥を連れてくる。

「まずは鳥ですか……」

「そうじゃ。まあ見ておれ」

機械を操作し、九官鳥に怪しげな光が当たる。するとたちまち……

「は、博士……。ちょっとグロテスクですね」

そこにあるのは人ぐらいに大きくした九官鳥の手と足だけが人間ぽいものであった。

「背中に翼の生えた人間なんかを想像したらいかんぞ。現実はあると厳しい物じゃ」

その言葉が図星だったのか助手が苦笑いする。

「オハヨ、ハカセ」

「さすがに喋れませんか……」

「いや、今のはギャグなんやけどな」

いきなりそういう九官鳥人間に驚く助手。

「はっはっは、わしがそんな出来損ないを作る訳がなかに」

「で、でも何で関西弁なんです」

「いや、わし関西生まれやさかい。それはそうと博士、このかつ

こきついんやけど……」

頭を掻きながら言う九官鳥人間に、博士が答える。

「あゝ、すまんすまん」

再び博士が機械を操作すると、さっきとは違った光線が出て、九官鳥人間は只の九官鳥へと戻った。

「次はこれじゃ」

博士が金魚鉢を取り出す。

「よいか、人魚なんかを想像するんじゃないぞ」

助手にそう釘を刺しつつ博士は作業にかかる。すると今度は人間大の金魚に手足が生えた生物となった。

「……」

しばらく刺身を食う気にはならないな、と助手が思っている側で魚人間が苦しみだした。

「は、博士、い、息が出来ない……」

「い、いかんいかん」

慌てて元に戻す博士。

「えら呼吸に問題があったか。考慮し忘れとった。では今度はミーコにするかの」

博士は縁側で日向ぼっこしている白猫を連れてくる。そして人間化光線を照射した。

「みゃゝ、かったるいにゃゝ」

これまた二本足で立つ猫の手足だけ人間に取り替えた姿である。

「どうじゃ？ 人間になった感想は？」

「かったるい……、からだが重いにゃゝ」

そう言ったミーコの側をネズミが走り抜ける。

「あ、博士、早く元に戻して！」

「おゝ、すまんすまん」

元に戻った途端、ミーコはネズミを追っかけていってしまった。

「す、凄いですね。動物と会話できるだけでも十分に価値がありますよ」

なにか人間化ではないような気がするが、とりあえず誉めなくてはなるまいと助手が言う。

「あまいぞ、これはあくまで物質人間化装置じゃ」

「え？」

博士の言っている意味が助手には理解出来ないらしい。

「物質人間化装置じゃ」

ことさら『物質』を強調する博士に助手が気づく。

「ま、まさか無生物でも……」

「そうじゃ」

「じゃ、豎琴なんか人間化するんですか？」

どこからか豎琴という物質を引っ張ってくる助手に博士は苦笑いしつつも答える。

「可能じゃよ。ただうるさくてかなわんだろうがな。ほれ、何か出してみたい」

そう言われて助手は作業着を探る。そしてポケットにいれっぱなしの金槌を取り出した。

「金槌か、ではやってみるぞい」

光線を浴びた瞬間、金槌は特撮・戦隊物の悪役のような金槌人間へと変化していた。

「喋れるのかな？」

助手の問いにうつすらと目を開けて金槌人間が答える。

「ああ、喋れるぜ。あんただな、毎日毎日俺の頭をこき使いやがったのは……」

「い、いやこき使ってるわけではないんだけど……」

金槌人間の凄味に腰がひける助手。

「俺さまの頭をこき使った罪はメガトンハンマーより重いぜ」

「も、元に戻そう」

博士がそう言った時だった。

「そうは行くか！ 食らえ、鋼鉄パンチ！」

金槌人間のパンチを紙一重で避ける助手。しかし、そのパンチは

助手の後ろにあった物質人間化装置へと命中した。

めきよ

という音がし、機械はバランスを崩して倒れる。どこかがショートしたのか光線が地面に向かって発射された。

……そして、土が盛り上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0285j/>

物質人間化装置

2011年1月16日03時22分発行